

第 1 回 千代田区まちづくりプラットフォームのあり方 検討会における委員指摘対応表

1 まちづくりプラットフォームの意義や定義

指摘	委員	⇒事務局の回答 ■対応方針
○背景にあったが、千代田区では参画・協働ガイドラインを運用しており、中身も充実している。これに加えてプラットフォームをなぜやる必要があるのか。ガイドラインに何が足りないのか。	内海委員	⇒一つの要素としては、早い段階から情報が必要だという声や、もっと情報が必要だという声もあり、納得に至るには情報発信が足りなかったと考えている。 ■第 1 章「3 背景」(P4)において、参画・協働ガイドラインの考え方及び現在のまちづくりの合意形成に新たな仕組みが必要であることを記載。
○新しいものというより、これまでのものを深く、自由に意見交換できる等の演出的な部分とかに課題があると考え。場や組織についても包括的なプラットフォームというより常時語り合える場や話せる機会、ファンドのようなものもあるので議論できれば良い。ハードに向けた都市計画をゴールにするようなものもあれば、エリアマネジメントのありかたのようなものもあると考えている。	印出井委員	
○検討会の目標は何になるのか。プラットフォームをつくるのが目標に見えるが、そもそもプラットフォームは何なのかを委員の皆さんもイメージできていないと考える。空間としての場所があるのか、機能があるのか、組織をつくらうとしているのか。組織の場合、誰が主体になるのか。P5の支援のイメージについても、第 3 者的機関なのか、誰が中心となるのか。	内海委員	⇒組織について、区と第 3 社的な組織のどちらが主体となるべきかは、機能とあわせて今後議論をしたい。そして、取りまとめまでに整理したい。 ■第 3 章 (P7)において、まちづくりプラットフォームが合意形成を支援するための組織であることを記載し、全体像についても記載する。また、第 4 章において今後の課題として、組織の主体について検討していくことを記載。
○この検討会としての合意形成とは何なのか。政治学的には、各人に拒否権が認められている中で、全員一致を目指すことは常識的に非現実的である、というのが前提である。その上で、非同意が顕在化しない状況を作り出すこととして議論してきた。一般的には、合意形成というのは、意見が食い違っているときに、互いの意見を納得のいく形で一致させることであり、今回のプラットフォームもそのような議論になるのではないか。そのとき、何に対して合意をしていくのか。千代田区全体なのか、いわゆるハードのまちづくりに限定するのか。	内海委員	⇒全員一致は難しいと考える。そのうえで、納得してもらえるか、地域が分断しないようにできるかが重要である。対象は、法的に定められたものはもちろん、それ以外についても広く考えたい。 ■第 2 章 (P6)において千代田区における合意形成のあり方を記載。また、第 3 章において「対象」を明記 (P7)。
○プラットフォームは、やはり言葉だが、千代田区ならではの定義をした方が良い。	出口委員長	⇒名称については、土台作りということでこの言葉を選んでいるが、皆さんとアイデアを出して考えていきたい。 ■第 3 章 (P7)にまちづくりプラットフォームの目的等を記載。名称については、議論が深まった段階で再度検討する。
○「まちづくり」という言葉には「ボトムアップ」という含意があったと思うが、現在はむしろ「まちづくり疲れ」を感じる。また「プラットフォーム」という言葉は多用されており使い方に幅がある。「まちづくりプラットフォーム」という言葉の使い方は留意が必要と思う。	三原委員	

<p>○多様なステークホルダーが集まって対話ができる状態をどう作るかが、プラットフォームのイメージになると考える。場所があったほうがいいのか、会議体なのかといったことは、そこに関わる方たちの意思によって異なると思う。</p>	<p>杉崎 委員</p>	<p>■第3章(P7)において、まちづくりプラットフォームがエリアプラットフォームの規模や取組み等に応じて支援することを記載。また、支援機能(P9)として、エリアプラットフォームの体制検討等への支援について記載。</p>
<p>○今まで千代田区がガイドラインを持っていたが、前提としているのが、行政が全部こたえなければいけないということである。そこに第3者が介することが、新しいタイプのプラットフォームかもしれない。今までは行政対住民だったが、隣に座る方に別の方をいれるだけで理解度が変わってくると考える。</p>	<p>出口 委員長</p>	<p>■第3章「1 目的」(P7)にまちづくりプラットフォームが第3者として支援することを記載。</p>

2 まちづくりプラットフォームの運営の仕組み

指摘	委員	対応方針
<p>○様々なことについて意見を求められる中、賛成の人と反対の人がいるが、反対の声が大きく、事業が進まないなど思うことがある。しかし、例えば私はAに対して賛成だと区に訴えかけようと思ってもどこに声を上げればよいか分からない。反対意見の強い言葉と、賛成でも反対でもない声、賛成の声をどう組み上げ、どうバランスをとっているのが疑問である。合意形成を進めるなら、賛成の人の意見もしっかり取り入れていくことでプラットフォームが機能するのではないか。</p>	金子委員	<p>⇒区としては受け身なのが現状だが、サイレントマジョリティ等、皆さんの意見を吸い上げる必要があると考える。その手法や仕組み等について考えていきたい。</p> <p>■第2章「3 千代田区における合意形成のあり方」(P6)として、多様な意見が整理できている必要があることを記載。また、第3章「4 まちづくりプラットフォームの機能」(P9)として、エリアプラットフォームを継続的に支援することを記載。</p>
<p>○賛成か反対かという二項対立的な構造では多様な意見を整理し難いと言える。また、選挙時の政党の主張のように、ある部分は賛成だがある部分は反対といったこともある。パッケージとしてとらえるのではなく、因数分解し解きほぐして、組み合わせでソリューションに持っていくことがプラットフォームなのかもしれない。今までのガイドラインにはそういう余地がなかったと考える。</p>	出口委員長	
<p>○千代田区の行政に意見を求める書類が届くことがあるが、書類が多くて読む気にならない。また、まちでビルの建設の高さの争いがあっても、会議に行くには会場に行く手間がある。30・40歳代が増えている中、その手間を惜しむ人が増えていると考える。手法を考える際には、手間を惜しむ人でも参画できる手法と、インターネット等が苦手な方向けのハイブリッド的な形を意識して考えられるとよい。</p>	櫻井委員	<p>⇒行政が苦手とするデザインの問題があったと考える。発信について工夫していくことは記載したい。手法について、参画のしかた、多様な方の声が拾えるようなことが重要なので、こういう手法があるとよいというものがあれば、ぜひご意見いただきたい。</p> <p>■第2章「3 千代田区における合意形成のあり方」(P6)として、多様な意見を聴取できるよう、多様な手法を組み合わせることを記載。また、第4章(P11)において、今後の課題として、ICTの活用等さらなる手法の検討について記載。</p>
<p>○まちづくりで住民が不安になる理由として、3つあると考える。一つ目ははどういったハードができるのかということが一般の方には想像できないことだと考える。二つ目は、地区計画のような全体的なものから個別のものができるまでのプロセスがイメージしにくいこと。三つ目は、自分たちがどこでどう関与して、まちづくりをよくできるかが分からないことだと考える。賛成意見をどう伝えればよいかや、いずれの意見にせよフィードバックが見えづらいということが不安につながっていると考える。</p>	田頭委員	<p>■第3章「4 まちづくりプラットフォームの機能」(P9)において、エリアプラットフォームへの支援機能として、合意形成に資するツールの提供を記載。また、第4章(P11)において、今後の課題として、さらなる手法の検討について記載。</p>
<p>○プラットフォームも様々な定義があるが、オンライン空間とリアル空間の両方があると考え。例えば台北市では、ジョインという台湾政府と国民のウェブプラットフォームで、政策課題や課題と感じたものを投稿し、一定期間内に5,000人以上の賛同者がいると政府が検討して回答するという仕組みになっている。一方、誰も賛同しないような意見は放置される。このような意見の提案からフィードバックに関するルールが明確されており、一連のプロセスが見えるようになっている。</p>		

指摘	委員	対応方針
<p>○リアル空間のプラットフォームは、区民参加の「参加」にバラエティがあると考え。ただ意見を表明するだけのものから、住民が企画運営するようなものもある。区民自身が運営するとリテラシーが高まって不安がなくなる面もあると考える。</p>	<p>田頭委員</p>	<p>■第3章「4 まちづくりプラットフォームの機能」(P9)において、エリアプラットフォームへの支援機能として、エリアプラットフォームの運営支援を記載。</p>
<p>○委員のいうコーディネーターのような人を育成するようなことがリアル空間で大事であると感じた。では、誰がコーディネーターをするのか、住民と区の役割がどうあるのかは、まちづくりの段階によって異なるので、各段階での仕組みを考える必要があると考える。</p>	<p>田頭委員</p>	<p>■第3章「4 まちづくりプラットフォームの機能」(P9)において、まちづくりの合意形成の統括機能として、(仮称)まちづくりコミュニケーターとして活躍できる人材の育成について記載。また、エリアプラットフォームへの支援機能として(仮称)まちづくりコミュニケーターやファシリテーターの派遣について記載。</p>
<p>○ICT やシステム、現代ならではのツールを活用し、物理的な制約を外して意見が言えるようにすることはよいと考える。ただそれをどうマネジメントするかが重要で、そのノウハウの獲得については、区がプラットフォームづくりの一部として取り組むべきであるという意見を頂いたと思う。区民の方々が関与するタイミングについても、先手を打ちつつ、模型やCGを活用しながら、少し先の情報をしっかりイメージ共有できるようにする必要がある。</p>	<p>出口委員長</p>	<p>■第2章「3 千代田区における合意形成のあり方」(P6)として、多様な手法を活用して意見を集約することを記載。また、第3章「4 まちづくりプラットフォームの機能」(P9)において、エリアプラットフォームへの支援機能として、ツールの提供を記載。第4章(P11)においては、今後の課題として、ICTの活用等さらなる手法の検討について記載。</p>
<p>○ICT を活用したり、サイバー空間上で意見を受けたりするときに、匿名性をどれだけ尊重するのが課題ということだと考える。また、合意形成の手前の流動的な段階のときに、どういう人が仲介することで、住民や関係者の理解を深めることができるのかといった点がポイントだと考える。</p>		
<p>○ネットも含めて賛成・反対をいただくときに危惧するところは、匿名性によって自由過ぎる意見を出せることになってしまうことである。意見を受ける側は実名でフロントにたって説明するので、そことの非対称性をどう解いていくかが課題と感じている。また、リアルの説明会ではしっかり名乗ってもらい、後日対応するため連絡先をいただくこともあるが、ネットではそういうことができない中、同じ一つの意見としてどう対応する必要があるか考える必要がある。</p>	<p>小松(語)委員</p>	<p>■第4章(P11)において、今後の課題として、ICTの活用等さらなる手法の検討について課題感とあわせて記載。</p>
<p>○今回のプラットフォームは、資料1のP5にあるように、様々な地域でエリアプラットフォームがあったときに、どういうメンバーで構成するのがよいか、どう進めていくかといったことを、総合プラットフォームで助言等ができないかという仕組みだと考えている。現在、合意形成をどこまで進めればよいのかを示すものがないため、総合プラットフォームとエリアプラットフォームのやり取りの過程を経て、まちづくりを進められる形をつくっていけるとよい。</p>	<p>加島委員</p>	<p>■第3章「1 目的」(P7)において、まちづくりプラットフォームがエリアプラットフォームを支援する組織であることを記載。また、第3章「4 まちづくりプラットフォームの機能」(P9)において、エリアプラットフォームへの支援機能として、運営体制やメンバー等に関する助言をすることを記載。</p>

指摘	委員	対応方針
○協議会等は、建物整備のためではなく、地域をどうしていこうという構想やガイドラインをつくるためのものである。ただそこで拠点の開発等がないと構想の実現につながらないということの次のステップとして、再開発等の話が出てくる。どういった時期にどういう形の組織をつくって協議するかも考える必要がある。	加島委員	■第3章「4 まちづくりプラットフォームの機能」(P9)において、エリアプラットフォームへの支援機能として、エリアプラットフォームの運営体制検討の支援について記載。
○ステークホルダーは、途中から参加する方や、計画が熟していく過程で反対になる方等もいる中、それに柔軟に対応していく場をどうつくるかというのが前提としてあり、あとはどう情報共有するかや、人に来てもらうための工夫等の個別の工夫があると考え。	杉崎委員	■第3章「4 まちづくりプラットフォームの機能」(P9)において、エリアプラットフォームへの支援機能として、エリアプラットフォームの合意形成の進め方等を助言・サポートすることを記載。また、情報共有や情報周知に資するツールの提供について記載。
○どの範囲で誰を対象にするのかということが大事だと考える。それを明らかにしないと「聞いていなかった」ということが外なのか内なのか分からなくなる。資料ではまちづくりの異なる規模等が示されているが、それぞれどういう方の意見をいただき、どういう方を対象に合意を作り上げるかというイメージを共有する必要がある。	小松(語)委員	⇒プロセスにおいて、対象などの可視化が不足していると考えられるので、検討したい。 ■第2章「3 千代田区における合意形成のあり方」(P6)として、議論の場において対象を明確にする必要があることを記載するとともに、資料編「(5)まちづくりの範囲(レベル)ごとの課題」(P23)において、各レベルで誰がステークホルダーとなるかを例示。
○今回の対象は、行政が主体的に決定し事業化するもの、地域が主体となるもの、事業者が主体になるものがあると考え。3つ目の事業者主体が多いのが千代田区の難しさで、スピード感も必要で、事業者が再開発も視野に入れたような中でこの議論をどうするのが課題である。	杉崎委員	■第3章「2 対象」(P7)において、エリアプラットフォームの実情にあわせて柔軟に支援することを記載。
○リテラシーを高めるということが一人ひとりに求められる中、単に専門家が説明しても、それを理解するときバイアスがかかってしまう。そのため議論ができるリテラシー、情報を理解するリテラシーを高めていくためにはどうしたらよいかも考えられるとよい。	日永委員	■第4章(P11)において、今後の課題として、広くまちづくりの情報を公開するだけでなく、興味・理解を含めるための取組みについて検討することを記載。
○会議体があっても横のつながりがないと情報共有ができない。しっかり情報共有ができて、問題を共有して解決できるようにした方がよい。	小笠原委員	⇒横の連携が可視化されて、手を取りやすくということが肝要だと考えているので、整理していきたい。 ■第3章「4 まちづくりプラットフォームの機能」(P9)において、まちづくりプラットフォームの合意形成の統括機能として、エリアプラットフォームの連携を推進することを記載。

3 合意形成のあり方

指摘	委員	■対応方針
<p>○正確な対話を通じて質の良い合意形成をしたいというのが理想だが、難しいと考える。そのため、自分のイメージと異なるけど、この手続きを踏んでこうなったら仕方ないと「納得」するところを探っていく対話をどう作るかということが目指すべきものだと考える。</p>	<p>杉崎委員</p>	<p>■第2章(P6)において「千代田区におけるまちづくりの合意形成のあり方」を整理。</p> <p>■合意形成の事例を、民間事業者等の対応等も整理したうえで資料として用意。</p>
<p>○納得するための手続き的公正という考え方があり、いくつかの条件があるとアウトプットは気に入らないけど仕方ないということになる。聞いている側もどうして反対していることに気づけると対話をつくれる。民間の事業者がどのように対応しているか次回以降いくつかの分類の中での合意形成の事例があるとよい。</p>	<p>杉崎委員</p>	
<p>○ステークホルダーが多様化している中、如何にしてお互いが理解し、納得するかがますます難しくなり、重要になってきていると言える。つまり合意形成という言葉置き換えると「納得」とか「理解」となり、ステークホルダーを特定する必要がある。そうするとどういった利害関係が発生するかを想定した上でステークホルダーを呼びかけることになるが、対象から漏れていたり、議論によって変わったりするから、議論を常に開いていることが大事だと考える。</p>	<p>出口委員長</p>	
<p>○合意形成については、全員一致というのは無理筋なため、多様性を認めることが重要である。そのため人口分布に沿った形で認めていくこともあってよいと考える。</p>	<p>大橋委員</p>	
<p>○千代田区は区民のカテゴリーが多様であり、地域の歴史もある。一方、大規模開発の中で小さい歴史的なお店等が継続しづらいという声もあるので、まちづくりのレベルや企業等、うまく連携しながら地域資源を継承するまちづくりが、「誰のためのまちづくりか」という問いを考える際に重要ではないかと考える。</p>	<p>田頭委員</p>	

指摘	委員	■対応方針
<p>○町会長をやると様々な充て職がある。そこで色々な会議に参加するものの、町会に帰ると町会員の皆さんと意見が異なり立場がなくなることもある。また、会議等の情報を持ち帰って町会員に伝える仕組み・方法がない。そうなると合意形成はできないなと感じる。町会に携わっている人間としてせつかくよい情報をもらっても、皆さんにどう伝えればよいか悩ましい。そのため、町会長だけでなく、もっといろんな人に抽選等で出してもらう仕組みがあってよいと感じている。</p>	<p>小木曾 委員</p>	<p>⇒町会だけではなく、広く意見を聴くこと、場づくりについても考えていきたい。また、お伝えした情報をどのように共有していただくかも検討したい。</p> <p>■第2章「3 千代田区における合意形成のあり方」(P6)として、多様な関係者が共通の情報を得られるようにすること、多様な関係者による議論が必要であることを記載。</p>
<p>○連合の婦人部長として10くらいの会議に出ている。マンションが増える中、情報を伝えるために町会の瓦版をつくり、全戸に個別で配布している。この取組みによって、まちの情報をわかってもらえるようになった。</p>	<p>小松 (恵) 委員</p>	<p>⇒現状、情報周知に関して明確なチャンネルの記載はなかったと考える。チャンネルを増やしていくこととあわせて検討したい。</p> <p>■「3 千代田区における合意形成のあり方」(P6)として、多様な関係者が共通の情報を得られるようにすることを記載するとともに、第4章(P11)においてその実現に向けた検討を進めることを記載。</p>
<p>○充て職についてのご指摘は、行政と区民のチャンネルが限定的になってしまうことが課題と言え。裾野広く情報伝達するためには、行政・区民のチャンネルをどう増やしていくのかを課題として整理していただきたい。</p>	<p>出口 委員長</p>	
<p>○まちづくりの範囲・レベルごとにこれまでの合意形成についての課題等、これから解決していかなければいけないものを整理していただきたい。それを基によりよいものをつくるという方向で進めるとよい。</p>	<p>日永 委員</p>	<p>■第1章「3 背景」において区全体の合意形成の課題を整理したうえで、資料編(P23)において、まちづくりの合意形成の課題を範囲・レベル毎に再度整理し記載。</p> <p>※実際は案件ごとに異なると想定</p>

4 まちづくりプラットフォームの参加者

指摘	委員	対応方針
<p>○地域の方は自分たちの生活にどう影響するかが問題で、それに事業者がいても響かない。同じ価値観を持っていたり、同じ生活圏内にいたりする方々が一緒に考え合意形成をしていくことが大事だと考える。プラットフォームを作るにあたっては、仕組み・機能だけでなく、どういう方々が間に入って説明するかが重要であると感じた。プラットフォームのイメージに記載のある専門家や事務局にどういう方が参加するかが重要だと考える。</p>	中田委員	<p>■第3章「3 まちづくりプラットフォームの全体像」(P7)において、専門家委員会に地域と行政等の間にたった合意形成を支援できる人として(仮称)まちづくりコミュニケーターを入れることを記載。</p> <p>■第3章「4 まちづくりプラットフォームの機能」(P9)において、まちづくりプラットフォームの合意形成の統括機能として、(仮称)まちづくりコミュニケーターとして活躍できる人材育成を記載。</p> <p>また、エリアプラットフォームへの支援機能として専門家派遣や(仮称)まちづくりコミュニケーター等の派遣について記載。</p>
<p>○都市計画に詳しいということではなく、むしろ地域を熟知して住民間に入っていただくような方が求められる人材像だと言える。資料では、プラットフォームは、あり方と仕組み、手法とあるが、人づくり、人を育てていくことをいれてもよいかもしれない。</p>	出口委員長	
<p>○100%に近い合意形成をした事例においては、地元の人などが中心となって丁寧に説明をした例が多かった。そのため、委員のお話はかなり説得力があり、今後協議していく必要があると考える。</p>	内海委員	
<p>○コーディネーターのような人を育成するようなことがリアル空間で大事だと感じた。では、誰がコーディネーターをするのか、住民と区の役割がどうあるのかは、まちづくりのレベルによって異なるので、仕組みを考える必要があると考える。</p>	田頭委員	
<p>○エリアプラットフォームの人材は、そこで起きようとしているものを地元の立場でしっかり解釈し、事業者ないし区の主張を地元の立場で受けて、地元の皆さんに説明できることが望ましい。それが仕組み等としてプラットフォームの中に備わっていると、合意形成の手前の応援団をつくるリードタイムを短縮できると感じた。</p>	小松(語)委員	
<p>○まちづくりに関して、地元から見た時の意見を周知いただくことで橋渡し役となってもらえると、意思疎通の時間が短縮されると考える。</p>	小松(語)委員	
<p>○千代田区は外国人の方も多く居住している。外国人の方にも多言語で発信していく方法を確立していく必要があると感じている。</p>	小笠原委員	<p>⇒多言語での発信について、今回の資料も日本語だけだが、今後の課題として受け止めたい。</p> <p>■第4章(P11)において、今後の課題として、千代田区の特性を踏まえた多言語での情報発信、外国人の参画について記載。</p>
<p>○翻訳にはコストもかかるし、限界があるので、区民の方にも協力いただく必要がある。ただ、外国人の方がまちづくりに興味を持てるようになるのは素晴らしいことで、そういった方が参画していただくための国際的なプラットフォームが望ましい。</p>	出口委員長	

指摘	委員	対応方針
<p>○千代田区は特殊なところがあり、誰のためにまちづくりを進めているかが見えづらい。昼間人口が非常に多く、夜間人口も増えたものの、統計データをみると流入・流出人口が毎年6,000人はいる。つまり10%が入れ替わっている。また、別のところに住んでいて、資産として土地等をもっている人もいる。一生懸命まちづくりをしようとしていることが資産家の価値をあげているだけではないかという感想も聞いたことがある。そうなると誰のために汗をかき、だれとコミュニケーションをとって合意形成を築くのか、土台が複雑である。</p>	三原委員	<p>■第1章「3 背景」(P2)として、千代田区の人口の増減や昼夜間人口比率について記載。</p> <p>■第3章「4 まちづくりプラットフォームの機能」(P9)において、運営体制や構成員等についても助言することを記載。</p>
<p>○区民と言っても地主も含め様々なステークホルダーがいるのが千代田区の特徴である。その辺を踏まえた区民のカテゴリーが他の自治体より広い。さらに人の流動性が激しい中で、プラットフォームをどう安定的に活用していくかが課題ということだと考える。</p>	出口委員長	
<p>○人と人がつながっていないと話にならないため、基礎的コミュニティの再建がこれを動かすときに大事になってくると考える。</p>	日永委員	<p>■第4章(P11)において、今多様な人々の参画の推進に向けて、基礎的コミュニティを強化する必要があることを記載。</p>

5 最終的な「まちづくりプラットフォームのあり方」のデザイン・情報発信

指摘	委員	対応方針
<p>○情報提供のあり方も、必要な情報を山のように積むことも大事だが、見る気にならない。例えば、地域に情報発信に長けた専門家がいると写真メインで情報発信をしている。そのあたりの情報発信の仕方一つとっても工夫していくことができると思う。</p>	<p>日永委員</p>	<p>⇒役所だから固くなっているのが現実だと考える。議論を進めながらアイデアを混ぜて、デザイン等についても取り組んでいきたい。</p> <p>■全体デザインのブラッシュアップは令和5年度に対応予定。</p> <p>■今回の検討のアウトプットとして以下のものを作成する。</p> <p>①あり方（本編・資料編）</p> <p>②あり方（概要版）</p> <p>③まちづくり推進の手引き（参画・協働ガイドラインの補完をするもの）</p> <p>②については、①の重要な部分を簡潔に分かりやすくしたものとして作成し、③については、具体の合意形成の手法や進め方、Q&A等、あり方に基づき整理したものを作成する。</p>
<p>○デザイン変わっただけでも読む気になったり興味をもったりする。このプラットフォームでは、デザインが重要なキーワードの一つになると考える。</p>	<p>出口委員長</p>	
<p>○カルチャーや理解が違う場合は戦わなければいけないので難しいが、少なくとも行政で行うことは互いにある程度寛容性をベースにすれば「納得はしていないけどどうぞ」ということがありうる。なぜそこにたどりつかないかは、一つは役所の立場で言うと文体が役所、つまり間違いがないようにしないといけない。つまこまれたときに応えられる言葉や文脈が必要になるので、言われたときに大丈夫なように作ると読む気がなくなる。一方、感情に任せていった言葉のほうが人の心を打つ。今回の議論では両方の心をまぜて話していたが、ロジックと感情の言葉を役所は一つにまとめられない。</p>	<p>糸井委員</p>	
<p>○感情の言語にたどりつくには、この会議が第3者に見えるかという信頼が重要である。そういうものと相まって展開されていくものだと考える。</p>		
<p>○漫才がこんなに流行っているのは、同じ仲間の中で違う視点を持ち込むことができているからだと思う。だから自然に聞いていられる。そのやり方をメディアはしていて、隣にいる人がわからないことをいったり、感情的になったり人が退席したりするなど、そのストーリーそのものがコミュニケーションのベースになっている。</p>		
<p>○漫才のようなつまこみとぼけをどう作れるかというときに、今やっていることで一番近いのが質疑応答集だと考える。ただ答える側の言語が今まで通り文句を言われたいためのものだから難しい。答える側に近所の旦那さんを入れたり、区役所の責任を持たない立場の人が答えたりするのをまぜた質疑応答集があるとコミュニケーションがつけられるのではないかと。</p>		

6 議論の整理に関する対応内容

整理内容	対応内容
<p>○資料1が今後の骨格になるので肉付けする形で次のたたき台を作っていくことになる。不足していることとして、背景の中に千代田区らしさがない。千代田区は地理的な特徴とは別に社会学的な人工学的な特徴を踏まえ、共有する必要がある。そのうえで千代田区のプラットフォームを考えていきたい。</p>	<p>■第1章(P2)において背景の整理を行う。</p>
<p>○これからの時代、ICT等物理的制約を超えるものを考えることがプラットフォームに必要だと考える。そういうツールを取り込んでいきたい。そのときに将来のイメージをどう共有するのか。将来のイメージの出し方や皆さんで描くプロセスを入れて頂きたい。</p>	<p>■第3章(P8)において、まちづくりプラットフォームがエリアプラットフォームを継続的に支援しながら取組みを進めていくイメージ(フロー)を記載。</p>
<p>○様々な会議体があるがつながりがないとの指摘や、人と人とのつながりの重要性を踏まえ、地域を繋ぐ人を位置付けていけるとよい。</p>	<p>■第3章「3 まちづくりプラットフォームの全体像」(P7)として専門家委員会の中に地域の実情に詳しい(仮称)まちづくりコミュニケーターを加えるとともに、まちづくりプラットフォームの統括機能として、その人材育成にも取り組むことを記載。</p>
<p>○「人」については、行政と住民・区民の間に入る仲介者や地域を熟知したコーディネーターといった人の存在が重要。行政が説明役のすべてを背負うというのではなく、第三者または別の語り口の方を入れることも効果的。また、相互に信頼(トラスト)を得ることを目指すプラットフォームにならないといけない。</p>	
<p>○合意形成という言葉が独り歩きしないように、「納得」「理解」「信頼」といった言葉で、一人ひとりの参加者がどうなったときにいえるのか、住民目線で考えていただきたい。</p>	<p>■キーワードを踏まえ、第2章(P6)で「千代田区における合意形成のあり方」を記載。</p> <p>—</p> <p>■本検討のアウトプットについて、「伝える」ではなく「伝わる」ものとなるようデザイン等検討をしていくとともに、まちづくりプラットフォームの機能であるデータベースにおいても同様に検討していく。</p>
<p>○合意形成という言葉が独り歩きしないで、一人ひとりの頭がどうなっていることが合意形成なのかということを整理していきたい。</p>	
<p>○合意形成に向けて重要なのは、「情報」と「人」である。</p>	
<p>○「情報」については、どのようにして伝え、共有するかが課題であり、区の広報のデザイン、情報配信の方法のデザインなど、デザインを改善のキーワードとする。</p>	<p>■本検討のアウトプットについて、「伝える」ではなく「伝わる」ものとなるようデザイン等検討をしていくとともに、まちづくりプラットフォームの機能であるデータベースにおいても同様に検討していく。</p>
<p>○個別の事例をあげずに議論してきた。個別をあげると誰かを悪者にしてしまうので一般論としてはなしてきた。そういう議論を続けていくのか、あるいは個別の事例をあげて議論していくのか、どちらがよいか事務局で考えていただきたい。</p>	<p>■参考資料として、個別の事例を用意。</p>